

みんなで楽しく地方創生

山形市副市長

井上 貴至 氏



10年前の東日本大震災。居ても立ってもいられなくなり、毎週末友人たちと被災地の石巻市雄勝に通いました。雄勝は伊達政宗公の頃からの日本一の硯石の産地ですが、石を削る高価な機械が流され、職人たちも廃業

を考えていました。

何とかしたいと思っていたとき、柔道を通じお世話になっている郵便局の幹部に声を掛けられました。「郵便局で寄付をしたいのだが、井上君、どこがいいかな」「雄勝の硯石はどうですか。郵便局による文（ふみ）の文化の復興です」。

2011年5月の早い段階で、3,000万円の寄付をいただき、今も職人たちは住み慣れた場所で、好きな仕事に取り組んでいます。その後、雄勝のスレートはJR東京駅の復元にも使われました。文翔館の屋根も雄勝のスレートです。市役所から文翔館を眺めながら、当時のことや行政官としての原点を思い出しました。

また、価値観も変わりました。「明日死ぬかもしれない。今日を全力で生きよう」という気持ちが強くなり、本業の傍ら全国を旅して、出会った人と事例を繋げながら新しい花を咲かせる「地域のみつばち」活動にも邁進するようになりました。

7年前、地方創生が国の主要な政策になりました。毎週末私費で全国を訪ね歩いている変な公務員がいるということで、一介の係長でしたが、政務官に呼ばれて、視察先をアテンドし様々な政策を提言するようになりました。

「被災地では国や企業から派遣された多くの人が活躍していますが、過疎化や高齢化が進んでいるのは日本全国共通の問題です。小さな市町村も頑張っている人がたくさんいますが、パスを出す人材が少なく、ドリブルが活きていません。小さな市町村にこそ国等の人材を派遣しましょう」。

こうして地方創生人材支援制度が生まれ、第一号として、私自身も鹿児島県長島町に派遣されました。長島町は世界一のブリ養殖の町ですが、高校や大学がなく、人口減少が続いていました。漁船に揺られながら「隣町の高校にバスで通わせているが、バス代だけで1人当たり月3万円かかって大変だ」というお話を伺い、考えたのが「ぶり奨学金」です。出世魚で回遊魚のブリにちなみ、成長して戻ってきてという願いを込めて、地元に戻れば返済を全て補填する奨学金をつくることにしました。高校生は毎月3万円、大学生は毎月5万円借りることができます。

常に意識していたのが、任期が終わった後も続く仕組みをつくろうということです。「ぶり奨学金」では、原資を住民・事業者の寄付やふるさと納税でまかない、貸し借りの手続きや将来の基金の予測については地元の信用金庫にご協力いただきました。「ぶり奨学金」を始め、町の皆様と一緒に、子育て・教育・移住・産業政策に取り組んだ結果、前回の国勢調査では出生率が2.2まで回復しました。

山形市においても住民や事業者の皆様からしっかりお話を伺い、何が本質的な課題かを考え、解決に向けて官民連携して挑戦していきたいです。どうぞ遠慮なさらず、様々な機会にお声がけくだされば幸いです。

（井上氏は1985年、大阪市生まれ。2008年東京大学法学部卒業後、総務省に入省。鹿児島県長島町、愛媛県庁出向、内閣府地方創生推進事務局参事官補佐から今年7月、山形市副市長に就任。文翔館正面玄関前で撮影）